

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（設問の都合上、省略した部分がある）。

中学校三年生の「真」は椅子デザイナーを目指しているが、父親には将来立派な会社に入ることを求められていた。父親に反発しながらも腕力^{わんりき}でかなわない「真」は、内緒^{ないしょ}でデザインの勉強を続け、同級生の「梨々」とデザイナーのコンペ（大会）に挑戦する^{ちゅうせん}ことになった。また、小学校四年生の弟の「力」のことがいつも気になっていた。

「おい、力」

茶の間でゴロゴロしながらテレビを覗^みている力に話しかける。

かあさんはじいちゃんを*1リハビリスイミング教室に連れていっているし、オヤジはまだ帰ってきていない。こういうときじゃないと、言いたいことも言えない。すぐにいじめていると思われるからだ。

「んー」

力はこつちを見もしない。

「おまえ、勉強しなくていいの。おまえの小学校も、もうすぐテストだろ」

「んー」

「おい」

力はやつと顔を上げると、めんどくさそうにぼくを見た。

「いいんだよ、ぼくは。ムリしなくていいの。がんばるのはお兄ちゃんだけでいいの」

「なんだよ、それ」

力はニカツと笑った。

「だって、おかあさんもおとうさんも、いつも言うもん。ぼくは生きてるだけでいいんだって。ムリをすると熱が出ちゃうから」ムカツとした。①こいつはいつもこれだ。

でも、たぶん力のせいじゃない。かあさんとオヤジが悪いんだ。

「熱が出るほど勉強しろとは言っていないよ。ただ、元気なら、テレビばかり観てないで少しは勉強もしたほうがいいんじゃないか」うるさいなあ。ほんとはテレビが観たいだけなんですよ。はいどうぞ」

力は立ち上がると、ぼくにリモコンを渡して、

A

歩いていく。

「待てよ、力」

「やだ」

力は階段を上っていく。

いつもなら、ここでぼくはあきらめる。なにもしないでいと親から言われている力に、なにを言ってもムダだったから。

でも、今日という今日は、決着をつけたい。オヤジに説教される腹いせに弟に説教をしようとしているわけじゃないと思うけど、どうしても、とことん言いたくなってきた。

ぼくは階段をかけ上り、力の部屋のドアをたたく。

「力、部屋に入ろよ」

「やだよ！ お兄ちゃん怖いから！」

「ただ話をしたいだけだよ」

「ぶつたら、おとうさんとおかあさんに言いつけるからね！」

ドキッとした。前に一度だけ、力をぶつたことがある。ぼくが小学校六年生で、力はまだ一年生だった。ぼくが大事にしていた*2ゴッホ展のカタログを力が勝手に持ち出して、どこかに置き忘れてきたのに、あやまりもしなかったからだ。初めて連れていってもらった思い出深い展覧会^{てんらんかい}で、とても気に入ったイスの絵があったのに。

「いいじゃん、また買えば」と、力はそのとき言った。でも、カタログは本屋で売っているものじゃないし、展覧会はとくに終わっていた。ぼくはかっとして、力のほったをひっぱたいてしまった。手かげんはしたつもりだった。でも力は大泣きし、そのあと熱まです出して、ぼくはオヤジにこっぴどく説教された。小さな弟をひっぱたいた自分と、わざと熱を出したんじゃないかと思う力に、ぼくは同時に腹を立てた。

それ以来、一度も手をあげたことはないのに、力はまだ覚えているんだろうか。ぼくがオヤジにひっぱたかれてぶっ飛んだときのよ

うに、こいつの心には恐怖の記憶としてこびりついているんだろうか。軽くたたいたただけだったのに。

そのまま力の部屋の前にすわりこんでいたら、ドアがそっと開いた。

「お兄ちゃん？」

「……」

「……入ってもいいよ」

力が **B** と言った。

ぼくは力の部屋に入って、ベッドに腰かけた。

「力……よく聞けよ。おまえさ、少しは勉強したいと思わないのか？」

力は首をゆらゆらと横にふる。

「たとえば算数で、ぱーっと計算して答えが合ってたなら、うれしくないか？」

少し悩んでから、力は小さくうなずいた。

「そりゃうれいだろうけど、たいてい合っていないから。ぼく、頭悪いもん。家庭教師の先生、何度かえてもすぐやめちゃったじゃない。ぼくがバカすぎるからさ」

こういうことを言う力は、本当にムカつく。なにもしないで、最初からあきらめてるんだ。

「おまえは頭悪くなんかないぞ。ただ、病気で授業に出ない日が多かったから、後れを取っているんだ。あと、がんばらないクセがついているんだと思うよ」

(中略)

「がんばると熱が出るもん」

「熱が出たらやめて休めばいい。元気なときは少しがんばる。ちよつとずつ、前進すればいい。おまえ、再来年、私立の中学を受験するんだろ？」

「うん。でもさ」

力はおもちゃをいじりながら、ぼくをちらちらと見る。

「作文で取った賞状を見せれば、受験勉強しなくても入れるんだって。だからね、おとうさんもおかあさんも、力はがんばらなくていいって言ってる。なのに、なんで？」

ぼくは小さなため息をつく。

弟にえらそうなことを言える立場かよ。自分だって、オヤジに怒られないためだけに勉強してきたくせに。

「……自分のためだよ。力、自分のためなんだ。親のためなんかじゃない」

自分に言い聞かせるように言った。

「そうなの？ お兄ちゃんは、おとうさんのために勉強してるんだと思ってたよ」

力は鋭いことを言う。

ぼくは苦笑いしながら、うなずいた。

「そうだよ。ずっとそうだった。でも、これからは、たぶんちがう。将来やりたいことが見えてきたんだ。そのために勉強するんだ。夢を実現させるためだよ」

「ふうん。でも、ぼくには夢なんて、ないよ」

「あるだろう？ なんか、将来やりたいこと」

力は弱弱しく頭を横にふった。

「お兄ちゃんさ、わかかってないよ。ぼくみたいな弱っちいやつのこと……」

「どういう意味だ？」

「夢なんてないよ。いつどこで倒れるかわからないんだ。毎年楽しみにしている遠足だって、行けたためしがない。運動会だって、玉投げ以外したことない。来週のこともわからないのに、将来の夢なんて、持てっこないじゃん。がんばると熱が出るし、ぼくは、自分っていうか、自分の体を信用できないんだ。そういうの、わかんないでしょ？」

②力の言葉は、心にじわじわと沁みていった。

たしかにぼくは、力に嫉妬した。けど、自分の体を信用できないなんて、一度だって考えたことがない。本当にこいつみたいに病弱になりたいか？

……いや、なりたくない。

来週のこともわからないから、将来のことなんて考えられない……か。

結局、ぼくは力の気持ちなんて、ぜんぜんわかっていなかったんだろう。遠足に行ったことのない力は、遠足のたるさも楽しさも知らない。自転車に乗って風を切ることも、ムシ暑い日に学校の冷たいプールに飛び込んだときのあの快感も知らない。マラソン大会で必死に走って、汗だくになってゴールにたどり着いたときのあの達成感も知らない。

「そうか。そうだな。たしかに、オレは、弱っちい力のことを、ぜんぜんわかってなかったみたいだな」
力はゆっくりとうなずいた。

「でもな、おまえだって、強いやつ苦しさをわかってないと思うよ」
力が口をとがらせた。

「わかるわけないじゃん。強いやつはなんにも苦しくないんだから！」
「それはちがう」

チビ相手になにをマジになつてんのかと自分でも思う。でも、なぜかわからないけど、今きちんと話しておきたい。

「あんな、力。強いやつだって、弱い心を持つてるんだ。オレは何度も……」
言おうか言うまいか、迷った。

でも、言ってしまうおう。

「何度も、おまえみたいに熱を出したいと思ったことがあるんだよ。テストや、試合や、いろんなことから逃げたくてね。でも、オレは強いから熱は出ないし、逃げるのは許されないんだよ」

力は、ぼくをまじまじと見つめた。

「……お兄ちゃんって、けっこうカツコ悪いんだね」

「知ってる」

③ ぼくたちは、二人同時に笑い出した。

「なあ、力、どうだ。すこーしだけ、がんばってみないか？ オレが勉強を教えてやるから。熱の出なさそうときだけな」
力は黙って考えているようだった。

「勉強がわかるようになると、学校の授業が少し楽しくなると思うよ」

「……それよりさ」

と、力は目を大きく開いて、ぼくを見た。「みんなにバカだって言われなくなるかな……？」

こいつはクラスで、そんなことを言われているのか。

「ああ。けど本当は、そういうことを言うやつのほうが、ずっとバカなんだぞ」
唇をぎゅつと噛んで、力は小さくうなずいた。

「……わかった。ちよつとだけ、がんばってみてもいいよ」

よし、と言って、ぼくは立ち上がった。

「じゃあ、明日から、毎日夕方の一時間だけ、勉強を教えるから。わからないことを、まとめておいて」

そのとき、はたと思った。そんな時間はあるのか？ コンペもあるし、自分の勉強もある。梨々の試験勉強も手伝うと約束した。毎日一時間取られるのは、きついかもしれない。ふと見ると、「うん」と言って立ち上がった力は、小さかった。ぼくの背がこのところ急に伸びたせいかな、えらく小さく見える。

ムカつく弟だけど、こいつはぼくがなんとかしないと、きつとろくなやつにならない。自分で自分をバカだと思ってるのは最悪だ。大体、力のクラスの連中に言いたい放題に言わせておけない。それに、その私立の学校に入れたところで、授業にぜんぜんついていけないんじゃないか、おもしろくないはずだ。

ぼくはドアのところをふり向いた。

「おまえ、兄ちゃんが怖いかな？」

力はこつくりうなずいた。

「怖いよ。だってお兄ちゃんはおつきいもん。口でもかなわない。なにをやってもかなわないよ」

力がぼくを見上げる姿が、自分とオヤジの関係と重なって見えた。これじゃぼくはまるで、オヤジと同じじゃないか。

「もう二度とぶたないから、安心しろよ」

力の頭にそつと手を乗せた。

「それにさ……」

力は急にもじもじしだした。

「それに？」

「ぼく、わかってるんだ。お兄ちゃん、ぼくのこと……嫌いでしょ？」

はつとした、そんな風に思わせていたなんて、怖がらせるよりひどい。

④ 腰を曲げて、力の視線に合わせる。

「嫌いなわけではないだろ。ただ……正直言うとな、オレはおまえのことがうらやましかったんだよ」

「えーっ、なんで？ お兄ちゃんは背が高いし、頭いいし、体力あるし、なんでもできるじゃん。ぼくと正反対。ぼくがお兄ちゃんより勝ってることなんて、ひとつもないじゃん！」

それを聞いて苦笑した。なんでもできるんじゃないよ。無理してるんだよ。がんばっても認められない。それでまた無理をする。スレスレがたまる。この悪循環から抜け出せないんだ。でも、そんなことを力に言ってもしかたがない。

「そんなことないよ。おまえは感性が鋭いし、素直だ。オレはどうがんばっても、おまえみたいな愛されキャラにはなれないしな。でも、もうヤキモチ焼くのはやめた。弱っちいやつの気持ち、少しわかったからね」

力はうれしそうにうなずいた。

「ぼくも、少しわかったよ。強いやつと弱っちい気持ち！」

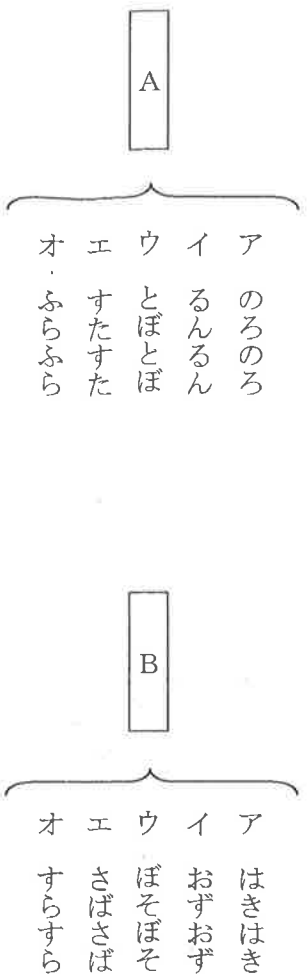
(佐藤まどか『一〇五度』より)

*1 リハビリ：治療を終えた人が、普段の生活に戻るために必要な訓練。

*2 ゴッホ展のカタログ：オランダの画家ゴッホの展覧会に出品されている作品をまとめている本。

*3 嫉妬：うらやましいと思うこと。

問1 ———— 線部① A B に当てはまる言葉として、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。



問2 ———— 線部①「こいつはいつもこれだ」とはどういうことですか。四十字以内で説明しなさい(句読点も一字に数えます)。

問3 ———— 線部②「力の言葉は、心にじわじわと沁みていった」とありますが、この場面における「真」の説明として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 力のことを将来の夢を持つともしない、悲しいやつだと考えていたが、自分の体が信じられないという話を聞いて、力が自分の体であつても思うように動かすことができないほど重たい病気にかかっていることが少しずつわかってきた。

イ 力のことをいつも体が弱いことを利用して、楽をしようとするやつだと考えていたが、父親のために勉強するのは嫌だという話を聞いて、力が実は自分の将来についてしっかりと考えられる心の強さを持っていることが少しずつわかってきた。

ウ 力のことを中学受験を甘く見ている、むかつくやつだと考えていたが、親が決めた進学先にしか行くことができないという話を聞いて、自分で将来について決めることができない辛い運命を送っていることが少しずつわかってきた。

エ 力のことを自分を弱いと決めつけている、浅はかなやつだと考えていたが、将来の夢なんて考えている時間は全くないという話を聞いて、力が目の前にあることに対して全力で取り組み、必死で生きようとしていることが少しずつわかってきた。

オ 力のことを何事に対してもやる気がなく、無気力なやつだと考えていたが、未来のことなんて考えられないという話を聞いて、力が夢をもつことさえあきらめなくてはならない悲しく切実な思いを持っていることが少しずつわかってきた。

問4 ———— 線部③「ぼくたちは、二人同時に笑い出した」とありますが、その理由を百十字以内で説明しなさい(句読点も一字に数えます)。

問5 — 線部④「腰を曲げて、力の視線に合わせる」とありますが、この時の「真」の気持ちを説明したものと、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分に嫌われていると力に思わせていたことを申し訳なく思い、その思いを少しでもやわらげるため、力に今この場であやまりたいと強く反省している。
- イ 自分にとつての父親の存在と同じように、力にとつて自分の存在がとても遠い存在であったことを知り、これからは力の気持ちに寄り添おうとしている。
- ウ 力のことが嫌いであるという本音を本人に見破られてしまい、これ以上自分の気持ちを隠し切れないと考え、力に自分の思いの全てを話そうとしている。
- エ 力から父親と同じような怖さを持つ存在だと思われていたことを知り、強くショックを受けると同時に、これからは優しく力に接しようとして決意している。
- オ 自分に嫌われているなどと力に思わせていたことを後悔するとともに、力がまだ自分に伝えられていない気持ちをどうにかして聞き出そうとしている。

問6 この文章の内容を説明したものと、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 茶の間でゴロゴロしている力を見て、両親が甘やかした結果、力にはがんばらないクセがついてしまっていると危機感を持った真は、何とかしてやる気を出させようと意気込んでいる。
- イ 以前ゴッホ展のカタログをなくしたのにあやまるどころか、うそをついた力を許せず、思わず手を出したことを、今でも力が覚えておくことに真は驚くとともに、後ろめたさも感じている。
- ウ 父親のために勉強しているということを見抜かれた真は、自分のために勉強をする必要があると力に堂々と伝えるように、将来の夢を実現させるための勉強を始めようと決意している。
- エ 力に勉強を教えると約束した真は、自分がやらなければならぬことの多さにあせりを覚えつつも、頼りなげな力を思うと、自分が何とかしなければならぬという思いを強めている。
- オ 無理をがんばっても認められない自分を、力は何でもできる兄と評価してくれていることに真は感謝しているが、本当は、力の素直で人から好かれるところにあこがれを抱いている。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい（設問の都合上、省略した部分がある）。

上手にものが作れないというのは、とにかく経験不足が一番の原因である。持って生まれた才能というものの影響は少ない。僕などは、その才能がない人間の代表のようなものだけれど、それでも作ることがたまに好きだったから、ずっと作り続けてきた。そして、この歳になってようやく、**①もの作りのセンス**というものがどんなものかに気づいた。才能のある人なら、10代や20代で素晴らしいものを作る。拘りのある**aシヨクニ**のような人が多く、周囲からは作品に対する賛美が寄せられるから、きっと本人も自分の才能があると自覚するだろう。でも、その人自身も、もの作りのセンスは具体的にどのようなものなのか理解していない場合が多い。持って生まれたセンスの大部分は、「想像力」である。作ったものがどのように機能するのかわからない結果が、あるいはどのように作っていかば良いかといった**bカテイ**が、映像的にイメージできる。つまり「見える」のだ。もともといろいろな**cタイシヨウ**を映像的に捉えているから、こういった想像力が養われる。その才能がない人は、より沢山の経験をjして、映像データを蓄積しなければならぬ。

また、それだけでは不足で、必要な才能のもう一つは、「慌てない」ということだと思われる。これには精神的に安定している必要がある。自分の時計を持っていること、さらに周囲からの影響を排除する*1シールドを備えていることが必要だ。

たぶん、僕に欠けているのは後者の安定性だと思われる。僕は、ものごとを映像で捉える人間なので、前者についてはそれほど劣つたところはない、と自覚しているが、安定した精神力については、子供の頃からまったくなかった。今でも、ものを整理したり片づけたりすることができない。一番苦手なのは、バッグの中にもものを入れることである。バッグにもものを入れるときに、どうしようもなくいらいらしてしまう。ステップを踏んで、遠回りをして、じりじりと進めることが、大の苦手なのだ。だから、僕が工作に楽しさを見出す最大の理由は、人並みの**dセイジツ**さを発揮できた自分（あるいはその成長）への拍手といっても良い。

映像的な思考について、少しだけここで触れておこう。

② 大学時代に、ある先輩と議論をしたときのことだ。その人は、漫画研究部の部長で、自分でも漫画を描く人だった。その彼が、「人間

は言葉によって思考している」と主張するのだ。言葉がなければ人間はものを考えることができない、という意味である。僕自身は、そんなことはまったくくない、と反論した。何故なら、僕自身、ものを考えるときには、言葉で考えるときと、映像で考えるときがあった、だいたい半々くらい割合だと自覚していたからだ。場所を思い浮かべたり、ものを作るときには、シーンや形を想像するわけだが、これは必ず映像である。数学の問題なども、ほとんどを映像でイメージする。けっして数字という記号(言葉)で考えているわけではない。あるときは、座標上に展開する曲面であったり、あるいは、幾何学的な形であったりする。こういったものも、明らかに「思考」だと思われるし、また僕はたぶん人間なので、「人間は言葉以外でも思考する」という結論が導かれる。

僕自身は、自分の意見を強く主張するつもりはなかった。何故なら、僕自身の一例だけで既に彼の「人間は言葉で思考する」という見解が間違っていることは明らかなので、議論をして彼を説得する必要は二次的なものでしかない。それよりも興味があったのは、「言葉でしか思考しない人間がいる」という事実である。少なくとも、そういう人間がいるから、そういう意見が出てくるわけで、その先輩もまたそのタイプの人なのである。彼によれば、頭に思い描く映像はあるけれど、それは「思考」ではない、ということらしい。ただ思い浮かべるだけで、そこに、^{*3} 作為を加えること(展開)ができない、と主張するのである。しかし、作為が加えられないならば、映像を思い浮かべて、どうすれば良いか、こうしたらどうなるか、ここはこんなふうだろうか、もつとこうしてはどうか、といった思考はできない。数学(特に幾何学)の問題を頭では考えられないことになる。これも、「映像を自分の頭で変化させることができない人がいる」ことが、僕には驚きだった。

おそらく、工作のセンスというものは、一つにはこの「映像による思考力」だと思われる。映像でものが考えられるかどうか、というのは、絵が描けるかどうか、ともあまり関係がないようだ。というのも、絵を描くのが仕事の人(さきほどの先輩は漫画が上手だった)でも言葉で考える人は多いし、逆に、文章を書くのが仕事の人でも映像で考える人もいる(僕がその一人だ)。

言葉というのは、^{*4} デジタルであつて、もともとある ^{*5} 概念を簡単に示すための記号である。「オートバイが好きだ」と聞いて、「そうか、オートバイが好きなのか」と簡単に思い込める人は言葉で思考しているかもしれない。すると、プレゼントにオートバイの置物なんかを平気で贈ってしまうだろう。A、「オートバイが好きだ」という言葉が表す状態は、もつと広い。オートバイに乗る

ことが好きな人は、オートバイの置物なんかもらっても嬉しくもなんともないだろう。B、乗ることにはまったく興味がなく

て、オートバイの歴史について調べている人かもしれない。昔のオートバイにしか興味がないとか、C、自分で設計したオートバイにしか価値を見出せない人かもしれない。D、オートバイといったって、どんな形のものを示しているのだろうか。それをイメージしたいから、「え、どんなオートバイが好き?」と映像で思考する人なら尋ねるだろう。

子供から大人に成長するカテゴリーで、人は沢山の言葉を覚える。言葉を使いこなしてコミュニケーションをとることが、人間関係を保つための能力となるし、また社会的な立場を ^eキズくうえでもこれが有力な武器となる。ただ、言葉を覚えることで、そもそもそのものが持っていた情報の大半が失われることに注意をしなければならない。これは、単語だけではない。「これはこうすれば良い」といった ^{*6} ノウハウも、言葉にした瞬間に単純化される。単純化によって、人へ ^f コウリツ的に伝えることができ、大勢で情報を共有できるけれど、その代わりに、本来持っていた情報の多くが欠落するのだ。

達人が持っているノウハウの大部分は言葉にならない。なんとか言葉になった一部を、周囲の人間が掬い上げる。そして、その欠片のようなものに ^g 纏ってしまふ。成功した人間の口から出たものが ^g カクゲンとなるが、そのカクゲンを覚えただけで、あるいはたとえ実行しても、同じ成功が掴めるわけではない。「ノウハウ」というものは、元来そういうものである。

^{*7} レシピや設計図の数値などは、かなり ^h 詳細なデータ化によって、再現性や精度を高めることは可能だが、それは単に「コピーの解像度」の問題であつて、もの作りのセンスではない。むしろ、そういったデータに頼っていると、センスはいつまで経っても養われないだろう。レシピどおりに作っていても、一流の料理人にはなれないのである。それは、個々のデータの何がどんな意味を持っているのか、何が違えば結果はどう変わるのか、といったことが ⁱ 試行錯誤の中から生まれてくるからであり、その体験をしなければ、ノウハウの応用が利かない。それでは、オリジナルの作品を作れない工作者であり、機械と同じである。

したがって、現代のように、レシピやノウハウというデータに ^j 満ち溢れている豊かな時代は、技術者自身が ^{*8} 稀少な存在であるから、必ずしも ^③ 極めて育ちにくい時代であることはまちがいないだろう。こういう時代には、技術者自身が ^{*8} 稀少な存在であるから、必ずしも価値が高くなるはずだ。引つ張りだこになる。しかし、それが本来の価値だと早合点してはいけない。技術の価値を認められる人間は、技術者以上に少ないから、正当な評価を受けることは、さらに難しい。

技術 ^h リソコクといわれる日本だが、技術者の ^{*9} 枯渴という問題を抱えている。否、将来はもつと深刻になるだろう。不足しているのは、^{*10} 工学部で学んだ ^{*11} エリートではない。おそらく、町工場などで働いていて、手作業でそのセンスを活かしているような人たちだろう。その人の目、その人の手でしか実現できない技術がたしかにある。それらを継承するためには、まずそういったセンスの存在を知ること、そして理解すること、さらに、同じくものを作るといふ体験を重ねること、しかない。「そんなことやっている暇はないんだ」と仕事をしている大人は言うだろう。そのとおり、そんなふうには言われ続けて、今の状況になったのである。だからこそ、子供のうちから工作に慣れ親しむような環境が必要なのではないか。

- *1 シールド…外から身を守るためのもの。
- *2 幾何学…図形や空間の性質について研究する学問。
- *3 作為…手を加えること。
- *4 デジタル…ものごとを部分的にとらえること。
- *5 概念…大まかな意味内容。
- *6 ノウハウ…ある専門的な技術やその蓄積のこと。
- *7 レシピ…料理の作り方。調理法。
- *8 稀少…ごくめずらしいほど少ししかないこと。
- *9 枯渇…つきはててなくなること。
- *10 工学部…工業生産の技術を研究する大学の学部のひとつ。
- *11 エリート…少数の優れた人。

問1 ———線部 a h のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 ———線部①「もの作りのセンス」とありますが、筆者は「もの作りのセンス」に必要な能力をどのようなものだと考えていますか。四十字以内で説明しなさい(句読点も一字に数えます)。

問3 ———線部②「大学時代に、ある先輩と議論をしたときのことだ」とありますが、筆者は先輩との議論を通してどのようなことを感じましたか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 単純な言葉でしか思考できない人間は、頭で映像を思い描くことができないタイプの人間なので、絵を正確に描くセンスがないと感じた。
- イ 人間は映像によってのみ思考し、言葉によって思考することはないと考える人が自分の他にもいるということに対して、興味深く感じた。
- ウ 言葉で思考することと、映像で思考することが半々ぐらいの割合でものを考えられる人間こそ、絵を描く仕事に向いていると感じた。
- エ 言葉でしか思考できない人間は、そのものが持っている重要な情報を単純化してしまうので、映像で思考できる人間より劣っていると感じた。
- オ 言葉で思考することしかできず、映像を思い浮かべて思考できないタイプの人間がいるという予想外の事実について、面白く感じた。

問4

A

D

 に入る言葉として、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい(ただし、同じ記号は二度使えません)。

- ア あるいは
- イ つまり
- ウ そもそも
- エ しかし
- オ もしかしたら

問5 ———線部③「極めて育ちにくい時代であることはまちがいないだろう」とありますが、筆者はこのような状況について、どのようなことをする必要が有ると考えていますか。九十字以内で説明しなさい(句読点も一字に数えます)。

問6 筆者の考えに合っているものとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 筆者は、上手にものを作るためには、誰もが自分の才能を発見し、若いうちからセンスを磨いていくことが何より大事だと考えている。
- イ 筆者は、ものを整理したり片づけたりすることができない人間は、ものを映像でイメージする力を身につけなければならないと考えている。
- ウ 筆者は、豊かな現代社会においては、詳細なデータの力を利用することを第一に、ものづくりのセンスを磨いていくべきだと考えている。

エ 筆者は、レシピ通りにしなくても、多くの料理経験を手がかりにしながらか自分なりに応用して調理出来る人が、一流の料理人だと考えている。

オ 筆者は、達人のノウハウは、達人自身の口から出た言葉を覚えたり実行したりする中で、少しずつ身についていくものだと考えている。

三、次の1〜5の慣用句と同じような意味を含む例文を後からそれぞれ選び、——線部のカタカナを漢字に直しなさい(ただし、答えは直した漢字だけを書くこと)。

例 手を結ぶ。

←

協力

・ 合唱コンクールに向けて全員でキョウリョクする。

- 1 肩かたの荷が下りる。
- 2 高をくくる。
- 3 あぐらをかく。
- 4 満を持す。
- 5 舌を巻く。

(例文)

- ・ ここは大事な場面だから、あせらずにジキを待って相手の出方を見よう。
- ・ 今日の対戦相手はきつと弱いだろうと思ってユダンしてしまった。
- ・ 試験が終わったので、今夜は不安からカイホウされてねむることができる。
- ・ 早起きしてサッカーの練習をしている弟を見ると思わずカンシンしてしまう。
- ・ 人気の高さをあてにしてオウチャクし、みんなの意見を聞かなかった。

受験番号

二〇二二年度 大阪星光学院中学校 入学試験解答用紙
国語

問1

A

B

問2

問3

問4

問5

問6

二

問1

e

a

<

f

b

g

c

h

d

問2

問3

問4

A

B

C

D

問5

問6

三

1

2

3

4

5